

学位論文審査の要旨

		要 旨
学位申請者	上田 祥代 【人間発達科学専攻 平成22年度生】	<p>車の運転など、システムを操作し、その応答をフィードバックとして与えられる例は、日常、多々ある。本論文は、このような操作－応答系における応答のばらつきを、認知情報処理における分散知覚の観点から検討した研究をまとめたものである。</p> <p>本論文は、主として3つの研究から構成されている。</p> <p>研究1では、操作－応答系における分散知覚の基礎過程を実験的に検討し、その内的メカニズムのシミュレーションを行った。</p> <p>研究2では、操作－応答系の観察（能動的観察）と操作を伴わない出力系の観察（受動的観察）との比較を行い、その結果、操作－応答系の観察の方が、分散知覚の感度が優れることを実証した。</p> <p>研究3では、「操作－応答のばらつきが大きくなることは、システムの異常を知らせる情報となる」という前提から、リスク認知と分散知覚との関係性を、ゲーム様式の実験を通して検討した。</p> <p>本論文に対し、審査委員会は以下の点を評価した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 操作－応答系の分散知覚という、極めてオリジナリティの高い研究を実施したこと。 2. 操作－応答系の分散知覚において、刺激－反応間の非線形性を、実験、モデル、シミュレーションで実証したこと。 3. 分散知覚とリスク認知の枠組みを提唱し、その妥当性を実証したこと。 <p>審査は、最終試験（公開発表）を含めて3回行われた。第1回の審査では、内容的には博士論文としての基準に達していると判断されるが、実験手続き上の問題点、理論上の問題点、表記上の問題点など、いくつかの問題点が指摘され、修正が求められた。第2回の審査では、上記の問題点の修正が確認されたものの、研究の位置づけやプレゼンテーションに関し、問題点が指摘された。第3回の審査（最終試験・公開発表）では、これらの問題点が解消され、明快なプレゼンが行われた。その後の質疑応答も問題なく遂行された。</p> <p>また、1) 海外での多数回にわたる研究発表、2) 博士論文の英文要旨等から、外国語能力も問題なしと判断された。</p> <p>以上から、本審査委員会は、全員一致で、本論文が心理学研究の発展に寄与するものとして、博士（学術、Ph.D. in Psychology）の学位を授与するにふさわしいと判定した。</p>
論文題目	操作－応答系の分散知覚に関わる認知情報処理過程	
審査委員	(主査) 教授 石口 彰	
	教授 内藤 俊史	
	准教授 上原 泉	
	教授 菅原 ますみ	
	青山学院大学教育人間科学部 准教授 薬師神 玲子	
インターネット 公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否（ 可 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 否 ）</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <p style="margin-left: 20px;">ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p style="margin-left: 20px;">イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p style="margin-left: 20px;">ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;"><input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> <p>※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	